

資料館だより

発行所

高松宮記念ハンセン病資料館
 〒189 東京都東村山市青葉町4-1-13
 電話 0423-96-2909
 FAX 0423-96-2981
 郵便振込 00130-7-764159
 高松宮記念ハンセン病資料館運営協力会

韓何雲の詩像を絵画に

趙昌源絵画展

「小鹿島の光と影」

資料館では 稲葉明雄先生 (翻訳家) のご紹介で、十月一日より十一月十七日まで館内研修展示室において「趙昌源絵画展—小鹿島の光と影—」を開催している。趙先生は韓国ソウル大学医学部を卒業。一九六一年、一九六四年(一次)と、一九七〇年、一九七四年(二次)の延十年間、小鹿島病院の院長として活躍されてきた方



旅愁・小鹿島から定着村に行く

ある。在任中は患者やその家族の人権を回復し、偏見差別をなくすため島内の一切の悪習を廃止、患者たちには歓迎されたが島民や周囲の住民には反感を買った。

ちを自分の戸籍に入れ、社会から差別されないような配慮もした。

また社会復帰の足がかりを求めて、対岸のオマド湾を干拓し三三〇万坪の新し

患者のサツカーチームを外部の試合に出場させたり、患者の子供た

い土地をつくるという、小鹿島八十年の歴史の中でも画期的な大事業を三年余りをかけて、菌陰性の入院者と、日本、アメリカなどからのボランティアなどによって遂に成しとげた。

工事中は折角つくった堤防が台風によって壊されたり、事故による死者が出たりして一時不穏な空気もあったが、趙院長の身を挺しての誠意と人間愛が通じて完成したものである。

その間、知り合った著名な「癡詩人」韓何雲氏に大きな影響を受け、その詩像をモチーフに小鹿島や患者たちの油絵を次々と画いた。今回展示される五十点の作品は全て資料館に寄贈されることになり、趙先生に深く感謝している。

なお、十月一日の絵画展オープンには、趙先生ご夫妻とともに、オマド干拓園として参加した当時の日本からのボランティア・早川さんらも来館し、趙先生と旧交をあたためた。

商工会がフェスティバル 資料館も2日間で656人

東村山市商工会が「らい予防法」廃止を記念し、「一層の理解と交流を」と8月24、25の両日、今年は今生園で「サマーフェスティバル」を開催した。

多摩研通りの桜並木の下に舞台が作られ、和太鼓やお琴の各競演、プロによる歌

謡ショーやカラオケ大会や民謡をはじめ、チビツ子広場のミステリー館やポニー

乗馬や木工細工、更に模擬店も沢山出、これを「朝日」が大きく扱ったことも影響して大変な人出となった。



「あつちへ来たら、凄くいいからっていわれて見に来た」とか「踊りに来たけど、見たら涙が出た。もつと時間をとって、また見に来ます」等々、二日間で資料館に寄って行った市民は六百五十六人

資料館では毎年、精神、難病、HIVの方々と交流会を重ねてきたが、今年は大阪HIVグループ(屋鋪恭一さん外)九名の合宿研修会が行われた。八月三十一日に全生園に集合した一行は、福祉会館において午

大阪HIVと 研修交流会

後二時から「ハンセン病患者として生きて」講師・平沢保治さん。「ハンセン、

かされた。

その後五時から自治会関係者、資料館関係者も加わり、夕食と交流会がもたれた。一日、資料館にこられた大阪HIVグループの方は「自分たちも資料館をつくりたいと思っており大変参考になった」と語っておられた。

研修交流会

HIV、精神障害差別の強い患者とかかわって」講師・大谷藤郎先生の話

を聞いた。

師・大谷藤郎先生の話

を聞いた。

ハンセン病疫学会

回復者三人が訴え

八月二十五日・名古屋市愛知県ガンセンターにおいて国立多摩研究所主催による「ハンセン病の疫学に関するシンポジウム」が開催された。この会議にはハンセン病関係の多くの医師とともに、IDEA(共生・尊厳・経済向上をはかる国際会議)のR・K・ゴパール会長(インド)、会員のホセ・ラミレスさん(アメリカ)と、ベトナムのハンセン病対策の責任者であるハノイ医科大学のレ・キン・ドゥエ教授、全療協の神事務局長、全生園自治会より三名(森元・平沢・天野)が参加した。

開催された夜の部の盆踊りに参加した。東村山音頭や秩父音頭に見ていた人も加わり、三重、四重の輪になって賑わった。

の三氏は、それぞれ自国のハンセン病対策の実情を訴え、参加者に感動をあたえた。

シンポジウム

ブックレット

十月末に発行予定

六月二十三日に全生園コミュニティセンターで開催された資料館三周年記念シンポジウム「これからをどう生きるか」のブックレットNo.4は、十月末に皓星社から発行される予定です。なお、この本には資料館三周年記念募集評論「らい予防法廃止について」の入选三編も、一緒に掲載される予定です。

IDEA一行全生園へ

国際的な連帯を訴える

ハンセン病の疫学に関するシンポジウムに参加した一行五人は、八月二十七日二十八日に長島愛生園、邑久光明園、大島青松園を訪問、二十九日は多磨全生園を訪れた。一行は多磨研究所、資料館、全生園を見学の後、三十日午後五時よりコミュニティセンターにおいて、自治会役員、施設八役等計四十一名で歓迎懇

親会を行なった。

ベトナムのドウエ教授や回復者で働きながら活躍しておられるインドのコーパールさん、アメリカのラミレスさんは、自国のハンセン病事情を説明しながら、偏見差別をなくし、患者や回復者の自立をはかるため、国際的なネットワーキングの必要性を訴えた。

入館者3万人に 団体客ふえる

資料館の入館者は八月八日、四人連れで来館された東村山市本町の樋口美穂子さんで三万人に達し、成田



さんで三万人に達し、成田

ハンセン病学会 パンフ作成と要請

今年四月、らい予防法が廃止されたことを受けて、日本らい学会は「日本ハンセン病学会」と名稱を変更したが、さらに学会内に社会啓発委員会（中島弘委員長）を設けた。

八月二十六日、中島委員長と、成田稔学会庶務幹事は、全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会（会長―細淵一男東村山市長）を訪ずれ、学校教育の場でのハンセン病の正しい理解を求め要請書を提出した。その際、同学会が作成した「小学生のためのハンセン病知識」「中学、高校生のためのハンセン病知識」のリーフレット三百部を手渡し活用を要望した。

細淵会長は「ハンセン病への偏見をなくし、知識を広めるために東村山市では全校にぜひ配布したい。また同協議会の構成自治体にも訴えて行く」と語った。

IDEA(アイデア)

共生・尊厳・経済的向上のための国際協議会

世界各国のハンセン病患者や回復者による国際組織で、長年偏見差別を受けてきた患者や回復者たちの社会復帰問題に取り組むことを目的に一九九四年九月結成。非政府組織。今年三月二十五日から三十日まで、中国広州市

で社会復帰者に関する第一回国際会議を開催、中国・インド・韓国・ブラジル・アメリカ・イギリスなど八カ国から八十人が参加、広州宣言が出された。（未加盟の日本からはオブザーバ

ーとして二名が参加した）なお、今年九月十六日から十九日まで、南スペイン・バレンシア地方で「世界のハンセン病療養所入園者の将来を考える」をテーマに第二回国際会議が開かれる。

映画制作委員会開かれる

制作のための募金は目標達成

映画「見えない壁を越えて」の制作委員会が九月二日、霞ヶ関の法曹会館で開催された。この日は新聞、放送、大学、厚生省、療養所、資料館関係者など二十人の委員が出席された。

大谷藤郎座長の司会で、

中山節夫監督が映画の撮影状況を報告、つづいて横田さんよりシナリオの内容について説明があり、各委員との質疑応答が行われた。撮影は予定通り行われ、来年二月には完成の予定。

なお映画制作資金の募金については、全療協各支部、私立二病院、全医労各支部、同本部、琉球病院支部、東北、青森、宮城、岡山地区協や、厚生省放射線技士会、同栄養士協議会、全国薬剤部科長協議会、厚生省臨床検査技士協議会、看護学校、

個人、資料館募金箱など各界より多大なご協力があり、目標の自己負担金(一四五、〇万円)に達しました。皆様のご協力で厚く感謝申し上げます。

来館者の声

多くの人の来館を

・学生 19歳 女性 練馬

当時のハンセン病の方々の生活や苦しみ、つらさなど、特に園内通貨がなまなましく語っているように感じました。今回で二回目ですが、まだまだ学び足りず(いつも閉館になってしま)う。また来ようと心に決め

ました。

・会社員 25歳 男性

ハンセン病患者の歴史をわかりやすく展示してありこれが広く、まだこの病気のことを知らない人たちに見てもらえればと思いました。

・看護婦 23歳 女性

予防法が廃止になるまで

を授与された。

全生病院長となり、傍ら保健衛生調査会委員、内務部社会課勤務、らい予防事務視察のため欧米各国などを

ともあれ、らいに明け、らいに暮れた光田健輔の足跡は是とするも非とするも、日本のらしい歴史の中で一つの時代を画した生涯であり、その時代的背景を見ずして語ることはできない。

先駆者⑨

光田健輔

一八七六〜一九六四

回った。

一九三一(昭和六)年、国立長島愛生園開設に伴い初代園長として転出、治療

生園名誉園長となる。山口

県防府市、岡山市の名誉市民、ダミエン・ダットン賞受賞、正一位勲一等瑞宝賞

昭和二六年に文化勲章を受賞、三二年三月三日退官し長島愛



・公務員 45歳 男性
誤った偏見と差別で、又国の施策で、どれだけ多くの患者さんやその家族が、辛く過酷な目にあつてきたかを今更乍らこの資料館で識りました。

◎あとかぎ

最近マスコミや出版物などで、ハンセン病問題が目立つようになった。また入所者への講演依頼もふえており、徐々に理解の輪が広がることを期待したい。修